

小川洋子「電話アーティストの甥」「電話アーティストの恋人」の読み方

楠田, 剛士
宮崎公立大学人文学部 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1787563>

出版情報 : 九大日文. 26, pp.33-42, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

《特集 文学と教育》

小川洋子 「電話アーティストの甥」 「電話アーティストの恋人」の読み方

楠田 剛士
Kusunoki Tsuyoshi

小川洋子の短編小説「電話アーティストの甥」と「電話アーティストの恋人」は、雑誌「ダ・ヴィンチ」と日本テレコムがタイアップした『日本テレコム SHOROTHEATER「心をつなぐ言葉たち」という企画において執筆・発表された。「二人の作家」が「同じ状況設定で別主人公のショートストーリーを二作執筆」するもので、その第六回目として「電話アーティストの甥」が「ダ・ヴィンチ」本誌(二〇〇四・五)に掲載され、「電話アーティストの恋人」がODNのウェブサイトに公開された^①。二作は同企画の他作家の小説を含めて、ダ・ヴィンチ編集部編『秘密。私と私のあいだの十二話』(メディアファクトリー、二〇〇五・三)^②に収録された。また、現代文の副読本である中島国彦監修『新 読む力・考える力を高める現代文学名作選』(明治書院、二〇一二年)にも再録された^③。

明治書院版では二作はそれぞれ三ページちよつとで、合わせても七ページである。小川の単著には収録されておらず、分量

も少ないため、これまで研究らしい研究は行われていない^④。しかし、以下で述べるように、短いながらも小川の小説の特徴がよく表れており、小川の他の小説へ学生を導きやすい。またその短さゆえ小説の細部に注目した授業が行いやすい教材である。テキストはそのことを考慮して収録していると思われる。本稿は、明治書院版のテキストを使用して行った授業に基づく読みの報告である。

一時間目

この小説二作を読むにあたってまず気になるのは、その奇妙なタイトルである。「電話アーティスト」とは何か。「電話アーティストの甥」では次のように仕事の説明されている。

電話をしている間、メモ用紙にボールペンで何やら、線のような文字のようなものを書きつける。あるいは、指で自由自在にコードをくねらせる。そうやってできたメモやコードが、作品になった。メモはコルクのボードにピンで留め、コードはガラスのケースに仕舞い、電話番号を作品の題名とする、というのが彼女のスタイルだった。

それで食べてゆけるようになるまでには長い苦労があった。若い頃は油絵を教えたこともあったらしい。

電話をしながら創作し、メモ用紙やコードを作品化し、電話

番号を作品の題名にするのが「電話アーティスト」である。その職業にあった伯母の死を悼む甥の「僕」を語り手とするのが「電話アーティストの甥」という小説であり、伯母の「恋人」だった男性（故人）の孫の「私」を語り手とするのが「電話アーティストの恋人」という小説である。伯母はこの仕事で生活できるようになるまでに「長い苦勞」があったという。「食べ」るために「油絵」教師も副業的に行っていたらしいが、祖父が「ほんの少し」「習っていた」のだから、おそらく学校の教員ではなくカルチャースクールのような職場だっただろう。とすると、その収入も決して公務員のような安定的なものだったとはいえない。アーティストを本業として暮らすこと自体、一般的に知られる絵画や音楽の世界でも厳しいのだから、世界に類のない「電話アーティスト」であればなおさら難しさが際立つ。

電話に関する、この極めてユニークで、独創的な職業が描かれるのは、前述した電話・通信会社とのタイアップ企画がまず理由になる。実際に、注4で示したように、他作家の小説にも電話やメールが描かれている。もちろんそれらはいずれも異なっており、作家たちはそれぞれに「電話」というお題を受け止めていることになる。「電話アーティスト」を描く小川にも「電話」に対する独自の受け止め方があったと推測される。

小川はあるインタビューの中で、『博士の愛した数式』（新潮社、二〇〇三・八）の「友愛数」について次のように答えている。

そういう魅力的な言葉にひとつでも出会えれば、小説は書

けるんです

一見文学とはもつとも遠く見える世界に、もつとも文学的な言葉が隠れていたりするんです。（略）小説って本当に面白いなあと思うのは、（略）なんら人間の孤独と関係なさそうな言葉が小説的な想像力を駆動させてくれるんです。

ほとんど一人一台携帯電話を持つ現在では、「電話」は「魅力的な言葉」からも「人間の孤独」からも「遠い、ありふれた言葉に見える。それを「もつとも文学的な言葉」として見出し、「アーティスト」と繋げたのが小川である。小川の小説にはこうした奇妙な仕事に関わる人間がしばしば登場する。音、骨、傷跡などの思い出を標本にする「標本技術士」（『薬指の標本』新潮社、一九九四・一〇）や、八〇分しか記憶がもたない「博士」（『博士の愛した数式』）など、事例はすぐに挙げることができる。

また、「電話アーティスト」二作では、電話関係の遺品や電話を掛ける行為を通じて死者の記憶が語られるが、高根沢紀子が「小川文学は《記憶》《消滅》の文学でもある」⁽⁸⁾と簡潔にまとめるように、記憶・死者という主題も小川の小説の特徴をなしている。こうしたことを踏まえれば、「電話」は単なるお題なのではなく、小川洋子という現代作家の資質に関わる重要なモチーフなのであり、「電話アーティスト」二作は、小川の小説世界への格好の入門作品になる。

では伯母はどのような人物だったのか。小説では直接登場せ

ず、甥の僕から見た姿が語られる。伯母は「風邪をひいて胸が苦しくなり、自分で救急車を呼んで三日後」に「亡くなった」。その死を僕は「誰の手も煩わせない、伯母らしい潔い最期だった」と語るが、伯母の人柄を示す第一のポイントは《潔さ》である。まずこれを手がかりに小説の記述を読んでもみたい。

伯母は生前「一人暮らしの、狭いアパートの一室」に住んでいた。小説で描く「場所」は小川にとつて重要であるらしく、「長編であれ短編であれ、私にとつて小説を書くのに何より重要な問題は、場所の決定である。そこさえパスすれば、話は自然と動きはじめる」、これから自分が描こうとしている物語にふさわしい空気とはどんなものなのか、白紙の原稿用紙を前にして思い悩む時間は、辛くもあるが喜びでもある⁹⁾と述べている。その言葉に従えば、「一人暮らしの、狭いアパートの一室」という「場所の決定」もまた、「物語にふさわしい」ものでなければならぬ。

小説中では伯母はいつから、なぜここに住んでいたのかは具体的に書かれていない。「結局、一度も結婚しなかった」ので「一人暮らし」をしていたわけだが、独身でも広いマンションに引っ越して住んでよいはずである。もちろん「いわゆる遺産と呼べるようなものは何も見当たらなかった」とあることを根拠に、今では「食べてゆけるようにな」ったものの、やはり電話アーティストの収入では生活が苦しかった、と考えることもできないわけではない。しかし、「まだあと十年や二十年は、創作活動ができ」るほどの「さまざまな種類のメモ用紙と、替

えの電話コードが大量に残されてい」たことからは、生活の貧しさはさほど伝わってこない。むしろ後述するように電話アーティストの創作活動のみに集中した空間になっている。「潔い最期」が伯母らしさを示しているのだとしたら、「狭いアパートの一室」という住まいのあり方には、部屋の広さや金銭にこだわらない、生前の伯母らしい「潔い」生き方が示されていると考えられる。その意味で「いわゆる遺産と呼べるようなものは何も見当たらなかった」のである。

次に伯母の人柄を示すポイントは、電話との繋がり（《特別さ》）である。これは電話アーティストの仕事を生生活の途にしていただけでも十分理解できるが、電話関係の遺品は仕事に対する伯母の向き合い方をより細やかに伝えてくれる。

僕は伯母が残したものについて、「部屋にはただ、さまざまな種類のメモ用紙と、替えの電話コードが大量に残されているだけだった」、「これならまだあと十年や二十年は、創作活動ができただろうに、と思われた」と語る。「メモ用紙」と「電話コード」は電話アートに欠かせない材料だが、「ただ」「大量」「だけ」という言葉の重ね方には、伯母の創作への真摯さが強調されている。また、僕は「遺品の中で最も立派だったのは、やはり電話番号帳だろう」、「表紙が鉛色の革製で、ずっしりと重く、金で伯母さんのサインが印字してあった」と語っている。電話番号帳に記された「電話番号」は「作品の題名」になるが、ここでも「最も立派」「やはり」と創作活動との結びつきが強調されている。電話番号帳そのものの色や、重厚さや、固有の

署名からも、世界に類のない電話アーティストの伯母の、長年にわたる独創的な活動の姿を知ることができる。死の間際も「自分で救急車を呼んだ」、つまり電話を掛けたのだから、伯母は最期まで電話と繋がっている。

なお伯母の電話番号については、さきほどの「狭いアパートの一室」問題との関連でいえば、引越しをすると固定電話番号が変わってしまうため（何度が引越しをした僕は電話番号が変わったという記述がある）、伯母の創作活動において、そして秘密の「恋人」との電話のやりとりにおいて同じ電話番号、言い換えれば固有の《特別》な番号を使うために引越ししなかったという理由も考えられる。

第三のポイントは、電話番号帳について「あいうえお順に整理された電話番号が、丁寧な字で記されていた」とあるように、《丁寧さ》である。《丁寧さ》は伯母の秘密の「恋人」との関係において顕著である。

電話台の引き出しの奥に、チョコレートチョコレートの空箱を見つけた。外国製の上等なチョコレートだったのだろうが、箱はもうすっかり黄ばんで薄汚れていた。蓋を開けると、メモ型電話アートのが、三十二枚出てきた。

クリップできちんと束ねられ、箱の真ん中に、静かにおさめられていた。長い時間、誰の手にも触れられていない様子だった。

豊かな表情を持った作品群だった。喜びと、恥じらいと、

ためらいと、哀しみが、細やかに絡まり合っていた。

「三十二枚」の「メモ型電話アート」全てに共通する題名「電話番号に僕が電話を掛け、その電話に出た私との会話の中で、伯母の秘密の「恋人」が私の祖父だったことが明らかになる。これが「電話アーティストの甥」の結末部である。

注目したいのは、その電話アートの置かれた場所である。「電話台」は、電話アーティストの伯母にとって創作の現場であり、最も重要な場所である。その「引き出しの奥」に、「蓋」をした「外国製の上等なチョコレート」の「空箱」の中にあつた。

「内密のイメージは、抽出や箱とかたくむすばれ」ているとバシユラールは述べているが、まさにこの「引き出しの奥」の「箱」は、伯母が祖父との秘密をいかに特別に、丁寧に仕舞っていたかを物語っている。さらにメモが「クリップできちんと束ねられ」、「箱の真ん中」に「静かに」収められていたことも《丁寧さ》を表す。僕は私に「作品を見れば、あなたのお祖父さまが、伯母にとってどれほど大切な人だったか、分かります」と話すが、作品の置かれた場所を見ることによっても「伯母にとってどれほど大切な人だったか、分かるのである。

ただし、伯母の《丁寧さ》は、この秘密の「恋人」だけに向けられるものではない。先に示したように電話番号帳にも《丁寧さ》が表出しており、電話の相手に対しても丁寧に対応していた。以下は伯母の電話の様子が語られた箇所である。

伯母は電話に関し、ある特別な能力を授けられていた。最高のタイミングでスパゲッティを茹で上げた瞬間に掛かってくる電話にも、落ち着きのある、可愛らしい声で応対することができたし、僕が何かの理由で落ち込んで、人恋しくなっている時、なぜかすぐさまそれを察知し、電話を掛けてきてくれるのが伯母さんだった。

例えば村上春樹の小説の登場人物だと、「台所でスパゲッティをゆでているときに、電話がかかってきた」ら、受話器は取っても、知らない相手に「ちよつとむつとし」た声を出すかも知れないが、小川の描く伯母は違う。この引用部分は伯母の電話に関する「ある特別な能力」の例示だが、自分に何か用件があり、自分が必要としている相手の電話をとる様子や、あるいは人を必要としている相手に電話を掛ける様子は、伯母の特別な《丁寧さ》を示す挿話になっている。

そして特に引用の後半部からは、伯母は甥の僕に対して「ある特別な」気遣いをしていたことが窺える。「遺品の中で最も立派」で「あいうえお順に整理された」電話番号帳の、「ページの一番最初、一行めに」僕の名前が記され、ページを開けばすぐに電話を掛けられたこともその証左である。また、僕が「何度か引越した」ので、電話番号帳には「修正液で書き直した跡が残っている」が、新しい番号を新しいページに書くのではなく、同じページに書き直すのも、伯母がそのページを書物における固定番号として丁寧に扱っているかのようである。

以上、伯母の人柄は《潔さ》、電話における《特別さ》と《丁寧さ》にまとめられる。これらは僕が伯母の遺品整理を行う中で改めて確認され、あるいは新しく発見された、伯母の生き方であった。では遺品整理を行う僕とはどのような人物なのか、次に考えてみたい。以下は小説の冒頭付近からの引用である。

一人暮らしの、狭いアパートの一室を片付けるくらいあつという間だろうと思っていたのに、実際はひどく手間取って、一週間近くかかってまだまだ終わらなかった。八十五年の人生は、僕の安易な想像よりもずっと長かった。

僕以外に伯母の親戚は登場せず、なぜ僕が、おそらく一人で、伯母の部屋を片付けるようになったのか、理由は判然としない。僕は片付ける前の自分の考えについて「あつという間だろうと思っていた」、「安易な想像」をしていた、と述べている。

だからといって、遺された電話アートを「豊かな表情を持った作品群」として受け止めるような僕が本当に「安易」な人間だとも思えない。遺品とはいえ「あつという間」に「片付ける」ことは、例えば専門の業者に頼めば可能だが、僕はそうはしていない。僕は遺品の電話番号帳のページをめくり、「ほとんど僕の知らない人ばかり」の番号の中に、「燃料屋さんや宅配ピザの番号もあった」と意外な発見をしたり、自分の番号の場所を探したりする。また、やはり重要な遺品である「三十二枚」の「メモ型電話アート」の番号に直接電話を掛けることまでし

ている。それは確かに「手間」に違いない。だが、そのことによつて「僕に電話をするために、何度となくその番号を指でたどつた」らう伯母さんの姿を、思い浮かべた」り、「握り直した」「受話器」に「まだ、伯母の温もりが残っているような気がした」りと思いを巡らせる。僕が片付けに「ひどく手間取つて」しまうのは、伯母の遺品、あるいは遺品が伝える過去の記憶の一つ一つに《丁寧》に思いを巡らせているからである。「電話アーティストの恋人」においても、僕から電話を受けた私が、「彼（注）僕」の口調に謙虚さが感じられたからだ。伯母さんの死を悼む気持ちにあふれているのが、受話器から伝わつてきた」と語つており、僕の《丁寧さ》を裏付けている。

こうして見ると、「安易な想像」をしていた僕が、遺品整理を行う中で伯母から《丁寧さ》を譲り受けているともいえる。もつといえ、遺されたものから死者に想像を巡らせる行為は読者にも体験される。例えば、電話番号帳にある「ほとんど僕の知らない人」は、伯母とどのような関係があつたのか。「燃料屋さんや宅配ピザの番号」があるのは、僕の「知らない人」と食事することもあつたのか、それとも伯母が一人で食べていたのか、あるいは老人の一人暮らしゆえに外に買い物に行けないことも多かつたのか……。その理由は描かれないが、その分「安易な想像よりもずっと」多くのことが考えられる。小説が読者の関わりを呼び出してくるところにも注目しておきたい。

このように「電話アーティストの甥」は、伯母を亡くした僕が伯母の遺品整理を《丁寧》に行う中で、伯母の《潔さ》、電

話における《特別さ》と《丁寧さ》を感じ取る物語である。電話関係の遺品には、伯母の生き方、いわば人生の「スタイル」が表現され、僕が生前に知つていただけではなく、知らなかつた過去も内包されている。「電話」は離れたもの同士を繋ぐ通信手段だが、「電話アーティストの甥」においては、生者と生者だけでなく生者と死者をも繋いでいる。

二時間目

「電話アーティストの恋人」は、「電話アーティストの甥」の僕が掛けた電話をとつた私を語り手とする小説である。「電話アーティストの甥」の後ろに位置するので、前作との繋がりを意識して読むことになる。冒頭にある「月曜日の夜」は僕の伯母が亡くなつた「十日」後のこと（よつて伯母が亡くなつたのは二週前の金曜日）であり、電話を掛けてきた「知らない男の人」は前作の僕であり、私の「家の電話番号が記されていた」「遺品」は、僕の伯母による三十二枚のメモ型電話アートである、ということが分かる。八十五歳で亡くなつた伯母が「二十年前」まで祖父と三十二年間、毎年一度だけ電話をしていたということは、祖父が亡くなつたとき伯母は六十五歳、伯母が祖父に関する電話アートを始めたのが三十四歳のときだと計算できる。そしていま「三十二歳」の私とあまり変わらない年齢だつたことや、五十年以上私の家の電話番号が変わつていないことが分かる。また、「あなたがお探しの人物は、たぶん、私の祖父だと

「思います」という私の台詞は二作に共通し、同じ電話の場面が違う視点で語られることを端的に示す。前作の僕が私に感じた「思慮深」さは、私が僕の「口調」に「謙虚さ」や「伯母さんの死を悼む気持ち」を感じ取っていることや、「正直に言えば」「けれど誤解しないでほしい」「少なくとも、孫の私の目にはそう映った」という聞き手〓読者を意識した語りかけにその一端が表れており、「思慮深さ」は私という人物を特徴付ける。

こうした前作との繋がりが示されながら、語り手の私によって、亡くなった祖父が回想され、祖父の人柄が語られていく。私によれば祖父は次のような人生を送っている。

彼は実に静かな男だった。自分がそこにいることを、できるだけ他の誰かに悟られないよう、いつも心を碎いているような人物だった。余計な口はきかず、物音を立てず、地味な装いを好み、皆が自分のことなど忘れて楽しくやってくれるのを、一番の喜びとした。少なくとも、孫の私の目にはそう映った。

この信念を持って彼は、村役場の設備課設備係の仕事を全うし、お見合いで出納課長の娘と結婚し、三人の子供と五人の孫に恵まれた。退職後はますます無口になって、ほとんど一日中、寝椅子でうとうとしていた。

回想された祖父の人物像は《静かさ》に要約される。「余計な口はきかず」「物音を立てず」「ますます無口になって」と文

字通りの静かさに加え、「村役場の設備課設備係」という他人のために働く公務員だったことや、「お見合い」「結婚」「子供」「孫」とそう特別でもなく「地味」にも見える人生を送ったことは、より《静かさ》を印象付けている。電話アーティストの伯母が人生に深く繋がった「電話」を掛けてから亡くなったように、祖父もその人柄にふさわしく「誰にも気づかれず、昼寝の途中に」静かに亡くなっている。

祖父が静かだったのは他人に無関心だからではなく、人一倍「他の誰か」を気遣うためである。私が「祖父の死は、安らかな記憶として、胸の奥のひっそりとした場所に仕舞われている」と述べるように、祖父の静かな気遣いは「安らか」さに通じる。そして孫の私が《静かさ》を祖父の「信念」として受け取っていたことから、その生き方〓人生の「スタイル」は決して他人に無視され理解されないものではなかったといえる。

このように「電話アーティストの恋人」も前作と同じく、故人の人柄が再確認されていく。前作が「僕の知らない人」の電話番号を見つけたら、三十二枚のメモ型電話アートを見つけたら、今まで全く知らなかった過去を発見していくのに対して、私の場合、「胸の奥のひっそりとした場所に仕舞われている」た自らの過去を引き出して、祖父の思い出を新しく意味付けていくことになる。まず一つが「油絵の具」の記憶である。

いつだったか、納屋の奥から油絵の具のセットが出てきたことがあった。絵の具のチューブはどれも干涸び、筆の

毛は抜け落ち、パレットは黴に覆われていた。

「おじいちゃんよ」

と、祖母が言った。

「昔、油絵を習っていたらしいわ。ほんの少しね」

絵筆を持った祖父など想像できなかった。彼が手に持っていたのは、スパナやペンチだった。皆すぐに、油絵の具のことなど忘れてしまった。

祖母はかつて「出納課長の娘」だった。「出納」の意味は「金銭や物品を出し入れすること」⁽¹²⁾であるが、この挿話では祖母が私の知らない祖父の過去を少しだけ取り出して見せており、僕との電話以前に、祖父の過去に触れた出来事になつてゐることは興味深い。前作との関連でいえば、伯母が「若い頃は油絵を教えていたこともあったらしい」という話と対応し、伯母と祖父との出会いが示唆されている。「納屋」も、「引き出し」や「箱」と同様に物を仕舞う場所なので、「納屋の奥」は「内密のイメージ」(パシユール)に結びつく。油絵の具セットが「干涸らび」「抜け落ち」「黴に覆われていた」のは、誰からも忘れ去られ打ち捨てられたためだろうが、同じ「長い時間、誰の手にも触れられていない」物でも、伯母の三十二枚のメモ型電話アートが丁寧に仕舞われていたことは対照的である。

ただし、「いつだったか」と私の記憶が定かではないことから、この出来事が祖父の存命中のことか死後のことか、どちらでも取れるようになってゐる。死後であれば、祖父が亡くなる

までは本人によつて丁寧に仕舞われていたかもしれない。もちろん生前においても本人においても丁寧に扱われなかつたかもしれない。いずれにせよ、油絵の具のセットの存在は、現在の私にとつて「アーティスト、と名の付く人に少しでも関わりを持つとすれば、祖父以外には考えられなかつた」理由になつてゐる。この言葉からはさらに、アーティストとの繋がりが静かな生き方をした祖父以外に考えられないほど、この家に住む私の家族も、祖父と同じか祖父以上に《静かな》生き方をしているのではないかという想像へ広がる。

また、祖母が「昔、油絵を習っていたらしいわ。ほんの少しね」と語つてゐることからも、様々な考えが浮かぶ。祖父が油絵を習つていたのが祖母と出会う(または結婚する)以前の出来事だから「らしいわ」と言つてゐるのか、伯母のことを知りつても幼い私に婉曲的に「らしいわ。ほんの少しね」と語つてゐるのか。祖父が油絵の具をどのように扱つたかという問題と同じく、理由がはつきりと描かれないことで「安易な想像よりもずっと」多く考えられる箇所になつてゐる。

記憶の再定義について、もう一つ大きな出来事が、祖父の電話の光景である。

「伯母は何度かお祖父さまと、電話で話していたようなのです」

男は言った。

「正確に言うくと、三十二回」

「なぜはつきりと回数が分かるのですか」

「そのたびに、お祖父さまへの思いを作品に残していたからです」

その瞬間、不意に一つの場面がよみがえった。長い時間忘れていたとは思えない鮮やかさで、光のように私の中に射し込んできた。そう、電話をしている祖父の姿だ。

電話などとは縁のない、友人もない祖父が、毎年一度だけ、確か初夏の頃、誰かに電話を掛けていた。亡くなる最後の年まで、変わらずにずっと。

これまで私には「皆が自分のことなど忘れて楽しくやってくれるのを、一番の喜び」にしていたような祖父に、電話を掛けたり掛けてくるような相手がいるとは思えず、なぜ年に一度誰かに電話を掛けていたのか分からなかった。しかし、僕の電話によって、いまは忘れてしまっていた過去の光景が鮮明に思い出され、当時は分からなかった出来事の理解ができるようになる。一方、電話を掛けた僕にも意味が繋がる。三十二枚の作品が、「伯母の誕生日」である「七月二日」に制作されたことは分かっていたはずだが、私の記憶から、作品群が伯母が掛けた電話ではなく、祖父が掛けてきた電話によって創作されたことが明らかに。

「電話アーティストの恋人」で繋がった意味は、前作へも繋がっていく。伯母の三十二枚の作品には、「誕生日」を祝う電話を受けての「喜びと、恥じらい」と、祖父が既婚者であるこ

との「ためらいと、哀しみ」という複雑な感情が込められていた。「結局、一度も結婚しなかった」のも、祖父への「思い」があったからだろう。「豊かな表情を持った作品群」が生み出されるのは、複雑な「思い」を「細やかに絡まり合」わせて創作できる、伯母の「電話アーティスト」としての才能があるからだ。祖父が電話を掛けるという表現行為があつて、伯母は初めて制作に取り掛かることができる。明治書院版の作品解説が、「生前の二人が織りなした関係こそ、型破りなアートであったのかもしれない」と指摘するのは、¹³⁾ そうした二人のありようを踏まえてのものである。狭義の芸術作品に限らず、関係性まで含めて「アート」と呼ぶならば、二人の「電話」にまつわる過去が、現在の僕と私に繋がり、見知らぬ男女の対話を生み出したことも、一つの「アート」と見なすことができる。言葉を発しない僕と私の「沈黙」もまた、「死者となった二人の人物のため」の「祈りの表現」¹⁴⁾ 「アート」である。

「電話アーティストの甥」と「電話アーティストの恋人」は、電話を通じた関係の連繋、言葉の連繋を描いた小説である。本稿の分析から見えてくるのは、離れたもの同士を結ぶ「電話」は、現在と過去、生者と死者との関係にも繋げられる「魅力」を持ち、「文学的な言葉」として機能するということである。短い作品だが、それを読むくらい「あつという間だろうと思つてい」る学生に、「手間」をかけ「何度となく」ページを「たどつ」て読んでいくことで「安易な想像よりもずっと」多くの問いがあることに気づかせることができれば、授業はきつとお

もしろくなる。遺されたものに丁寧に向き合う僕と、よく分からないものを「すぐに切ら」ずに対話を続ける私を描いた小説そのものが、小説を子細に読む方法を教えてくれている。

【注記】

- 1 「ダ・ヴィンチ」(二〇〇四・五)
- 2 初出と初刊の異同は、最初の段落の「最後」(初出) ↓ 「最期」(初刊七〇頁)のみが確認できる。
- 3 <http://www.odn.ne.jp/dawinci/> 二〇一五年八月三十一日現在、見ることができなご。
- 4 小川以外の収録作品は以下の通り。
吉田修一『「不在票」OUT・SIDE』、『「不在票」IN・SIDE』
森絵都『彼女の彼の特別な日』、『彼の彼女の特別な日』
佐藤正午『ニラタマA』、『ニラタマB』
有栖川有栖『震度四の秘密——男』、『震度四の秘密——女』
篠田節子『別荘地の犬 A・side』、『別荘地の犬 B・side』
唯川恵『「ユキ」』、『「ヒロコ」』
堀江敏幸『黒電話——A』、『黒電話——B』
北村薫『百合子姫』、『怪奇毒吐き女』
伊坂幸太郎『ライフ システムエンジニア編』、『ライフ ミッドフィルダー編』
三浦しをん『お江戸に咲いた灼熱の花』、『ダーリンは演技派』
阿部和重『監視者／私』、『被監視者／僕』
- 5 初刊と明治書院版の異同は、「気持」(初刊七六頁) ↓ 「気持ち」(明治書院版二二七頁)と、「油絵具」(絵具)、「油絵具」(初刊七七頁) ↓ 「油

絵の具」「絵の具」「油絵の具」(明治書院版二二八頁)がある。

6 千野帽子『小川洋子著作解題 悪意と希望をつなぐ橋。』(「文藝」二〇〇九・八)に簡単な作品紹介がある。

7 小川洋子、聞き手＝千野帽子『なにかがあつた。いまはない。』(「ユリイカ」二〇〇四・二)

8 高根沢紀子『小川洋子の文学世界』(高根沢紀子編『現代女性作家読本

② 小川洋子『鼎書房、二〇〇五・一一)

9 小川洋子『犬のしっぽを撫でながら』(集英社、二〇〇六・四)七九頁。

10 ガストン・バシユラル『空間の詩学』(岩村行雄訳、ちくま学芸文庫、二〇〇二・一〇)一四八頁。

11 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第1部 泥棒かささぎ編』(新潮社、一九九四・四)七七八頁。なお、小川は村上とその作品について「自分が歩こうとしている道の前をすでに歩いている大きな存在としてありました」と述べている(前掲注7)。

12 中島国彦監修『新 読む力・考える力を高める 現代文学名作選』(明治書院、二〇一二・一)二二八頁にある語注からの引用。

13 「指導用CD-ROM」(前掲注12)

※ 小説本文の引用は明治書院版による。また、本稿のもとになった授業を、北九州工業高等学校と宮崎公立大学で行った。受講生からは、電話アーティストという発想のユニークさ、小説の細部を辿ることのおもしろさ、自分と電話との関係の見直しなどに関するコメントがあった。受講生に感謝申し上げます。

(宮崎公立大学人文学部助教)